「山形県小児保健会委託研究　研究報告書」

１．研究者

目黒亨、川崎直未、安達幸輔、簡野美弥子、佐藤裕子、上村雄太、三井哲夫

２．研究テーマ

小児貧血についての県内調査

３．研究概略

【背景と目的】

小児期に生じる貧血の多くは乳幼児期または思春期に発生する鉄欠乏性貧血で、成長にともなう鉄分摂取量の相的な不足、月経（女児・女子)、生活環境の変化（食生活の変化による絶対的な不足、ダイエット、部活動等の激しい運動）等が主な原因とされている。

本邦では最近、小児貧血が 5.2%と他国に比し多いと考えられる報告が出た（4,133 人の 1-5 歳児を対象に行った、パルスオキシメータでの非侵襲的検査報告 Biosci Biotechnol Biochem. 2025 Feb 20;89(3):417-422)）が、当県での特に就学児童・生徒に対しての詳細な検討はまだされていない。

また、食事などの環境要因に加えて遺伝的素因の関与、近年話題となっている鉄剤不応性鉄欠乏性貧血や、非鉄欠乏性貧血（サラセミアや溶血性貧血など）の存在も充分考えられ、貧血の発症と環境・遺伝的素因との関係が明らかになれば、予防法や治療法の確立につながる可能性がある。

今回私たちは県内の小児貧血について実態調査を行い、当県の小児貧血の発生状況、より良い治療環境・予防方法の整備を目的に本研究を行う。

【対象と方法】

2015 年 1 月から 2024 年 12 月までに当院小児科血液外来または救急部を受診し、貧血と診断された 6 歳から 15 歳までの小児患者を対象とし、貧血に関わる診療情報を後方視的に検討した。

【結果】

10 年間で、鉄欠乏性貧血 9 例（鉄剤不応性鉄欠乏性貧血 2 例を含む)、回避性摂食障

害に伴う貧血 1 例、サラセミア 2 例、遺伝性球状赤血球症 2 例、溶血性貧血 1 例、失血に伴う貧血 3 例（うち 2 例は過多月経に起因する)、再生不良性貧血 2 例、RCMD（多血球系異形成を伴う不応性血球減少症）1 例、マクロファージ活性化症候群に伴う汎血球減少症 2 例の新規診断症例を得た。この他に、原因を特定・推定できなかった症例が 2 例みられた。

鉄欠乏性貧血 9 例（9-15 歳（中央値 12.5 歳））の男女比は 2：7、偏食の既往は 6 例で確認できた。痩せた体格（ローレル指数 115 未満、または BMI18.5 未満）は 4 例、太った体格（ローレル指数 145 以上、または BMI25 以上）は 1 例であった。

回避性摂食障害に伴う貧血 1 例は初診時のローレル指数は 96 と低く、refeeding 症候群の出現に注意して緩徐な体重増加を図り、伴い貧血は改善した。

サラセミア 1 例、遺伝性球状赤血球症 1 例では、同病の家族歴が確認された。

【考察】

再生不良性貧血、マクロファージ活性化症候群に伴う汎血球減少症など、稀、かつ集学的治療を必要とする症例は県内各所から当院へ紹介または救急搬送されることが多いため、本結果は当県 6－15 歳小児がこれらの疾病を発生する実数を一定程度反映していると考えられた。

一方で、学齢期児童・生徒における鉄欠乏性貧血患者では、地理的に通院しやすい診療所・病院を受診し、大学病院では鉄剤不応などの非定型的症例の紹介を引き受ける「住み分け」がなされる傾向がある。思春期における偏りのない食事・適切な運動の指導が不可欠であるが、本研究で得られた鉄欠乏性貧血症例は当県の小児人口に比し少数であり、今後基幹病院小児科・開業小児科の先生方の協力を得て、県内の鉄欠乏性貧血患児の発生数・実態把握を行ってゆくことが必要と考える。